

令和 2 年 5 月 26 日現在

機関番号：32665

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16790

研究課題名（和文）現代英語圏黒人文学における子ども表象についての研究

研究課題名（英文）The representation of children in the contemporary black diasporic fictions

研究代表者

岡島 慶 (Okajima, Kei)

日本大学・経済学部・准教授

研究者番号：10710569

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、現代英語圏黒人文学において頻出する子どもの人物に焦点を当てた。こうした子どもが黒人ディアスポラ共同体における文化的差異を越え、どのような特色を持ち、いかなる役割を果たすのかを比較文学的に調査した。その結果、現代英語圏黒人文学に登場する子どもたちは、「パリンプセスト」とも言うべき特質が備わっていることが判明した。西欧文化において「イノセント」の象徴として登場する子どもとは異なり、黒人の子どもたちは、「過去」や「記憶」と密接に結びついており、彼らの身体には民族の傷が深く刻まれている。しかし、その過去の傷にこそ、連綿と続く暴力や差別の世界で生き、抗うための英知が秘められている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもが主要な登場人物として描かれる作品は枚挙にいとまがない。しかし、本研究が行ったポスト植民地主義の文脈から英語圏黒人文学における子ども表象に特化した研究は驚くほど少ない。本研究で判明したとりわけ興味深い点は、黒人の子どもの登場人物が二重の歴史性を帯びる点である。すなわち、古くからある黒人＝子どもという植民地主義言説を意図的に照射し、これを転覆させながら、貧困や戦争、人種差別といった21世紀における新たな世界的問題をあぶりだしていくのだ。本研究の学術的意義は、英語圏黒人文学における子どもたちに付与されたこのような特質を浮かび上がらせた点にある。

研究成果の概要（英文）：This study has examined the complex role of the black child protagonists who emerge so prominently in contemporary black diasporic fictions published from the 1970s to the early 21st century. In literatures published after mid-1960s when former European colonies achieved independence and African Americans successfully won Civil Rights, African and African American authors mobilized the figure of children as active agents that address the various issues of their national or cultural identities. Through the vigorous investigation of the four primary texts, this study has discovered that the black male and female children in these novels feature “palimpsestically” to restore memories and histories of their ancestors. In the context of the necro-political turn of contemporary world, their palimpsestic memories serve as great resources for them to use in order to survive, resist, and even execute revenge.

研究分野：英語圏文学、黒人文学、アメリカ文学

キーワード：黒人文学 子ども ポスト植民地主義 パリンプセスト 黒人ディアスポラ

1. 研究開始当初の背景

本研究が立脚するのは主として以下の3領域である。、 の分野では近年目覚ましい研究がなされており、とりわけ本研究の理論的枠組みはこれらの先行研究から重要な知見を得ている。

20世紀後半以降の英語圏黒人文学:本研究では、ナイジェリア出身の Ben Okri の *The Famished Road* (1991)、Chris Abani の *Song for Night* (2007)、アメリカの黒人女性作家の Toni Morrison の *The Bluest Eye* (1970) や Octavia Butler の *Fledgling* (2005) といった文学作品を分析する。全ての作品に「子ども」が主人公として登場する。

アフリカン・ディアスポラ研究: Paul Gilroy の *The Black Atlantic* (1993) を嚆矢として、大西洋奴隷貿易に始まるアフリカ黒人の離散(ディアスポラ)の地球規模での社会・文化的影響について多くの研究がなされており、これらの研究は、本研究の文化的位置づけを明確にするための理論的枠組みを構成する。なかでも、ディアスポラ黒人の新たなアイデンティティの在り方を “Becoming” であると説明する Stuart Hall の論文は有用であり、黒人の主体意識の中に植民地主義の「過去」と現在進行形で変化し続ける「未来」を並列的に内包する歴史観があることを明らかにしている点で極めて重要である。

「子ども」と人種についての文化研究: 「子ども」が欧米による植民地支配のレトリックに利用されているとした Frantz Fanon の指摘は、本研究の前提を成す。一方アメリカにおいて、子どもが持つとされるイノセンスは主として白人性の象徴であり、黒人の子どもには付与されてこなかった資質であると論じる Robin Bernstein の研究も有用である。二つの研究が示しているのは、コンテクストに応じて、黒人に子どもの資質が付与されることもあれば、剥奪されることもあるという点であり、「子ども」と人種の間を研究する上で役立つ。

2. 研究の目的

旧植民地が独立し、アメリカで公民権運動が活発化した1960年代以降、新たな国家的・文化的アイデンティティの確立を模索したアフリカ諸国やアメリカ黒人の作家たちの作品には「子ども」が主要な登場人物として頻出する。本研究の目的は、20世紀後半から21世紀にかけて出版された英語圏黒人文学における「子ども」の表象に注目し、主に旧植民地の脱植民化の文脈から現代の黒人作家たちが描く「子ども」像が持つ戦略を分析し明らかにすることである。本研究で明らかにする具体的な戦略とは、植民地主義や奴隷制のレトリックに利用された、白人=(父)親、黒人=主人である白人の所有物であり、保護されるべき「子ども」という人種的、父権的権力関係に基づく二項対立的図式を揺るがす効果を持つこと。植民地支配によるトラウマを継承しながらも、肯定的、創造的未來を提示する点。すなわち、アフリカン・ディアスポラ文化に立脚し、現在進行形で変化し続ける流動的な主体意識を提示し得ることである。

3. 研究の方法

本研究の方法論的枠組みとしては、ポスト植民地主義理論と子どもについての文化研究を英語圏の黒人文学研究において融合させる手法を用いた。これにより、文学作品における子どもの表象は、作品における抽象的な概念に留まらず、新植民地主義がもたらしている今日的課題に具体性を与え、それを明るみに出すという重要な任務を帯びている点を示す。本研究の中心となる作品分析については、先行研究はもとより、文化研究、歴史研究、思想史研究など多岐にわたる文献調査を行い、ポスト植民地主義やトラウマ研究などの理論的枠組みを補強しながら、各々の作品に登場する子どもの特徴を浮かび上がらせていった。さらには、執筆中の論文などについて新たな知見を得るために、米国の研究者たちと意見交換をした。また、現地の図書館や博物館に赴き、黒人文化、奴隷制関連の一次資料の閲覧を行った。

4. 研究成果

本研究では、現代英語圏黒人文学において頻出する子どもの人物に焦点を当てた。こうした子どもが黒人ディアスポラ共同体における文化的差異を越え、どのような特色を持ち、いかなる役割を果たすのかを比較文学的に調査した。その結果、現代英語圏黒人文学に登場する子どもたちは、「パリンプセスト」とも言うべき特質が備わっていることが判明した。つまり、過去の記憶と未来への可能性が入り混じる存在として登場するのである。西欧文化において「イノセント」の象徴として登場する子どもとは異なり、黒人の子どもたちは、民族の「過去」や「記憶」、そして「トラウマ」と密接に結びついており、彼らの身体には民族の傷が深く刻まれている。子どもの登場人物に付与された役割は、民族の集団的記憶に立脚しながら新たなアフリカン・ディア

スボラアイデンティティの創造へと向かうものであるのだが、同時に、こうした子どもたちは、21世紀社会が直面するグローバルな規模での諸問題 - 新植民地主義や、貧困、内戦、人種差別にヘイトクライム - の存在をあぶりだす役割も果たしている。21世紀社会の在り様は、生をめぐる権力がシフトし、「生政治」からいわゆる「致死の政治」へと移行していく時期であり、新たな黒人ディアスポラ・アイデンティティの担い手である子どもたちも種々の危険にさらされる世界となっている。しかし、彼らに刻まれた過去の傷やトラウマにこそ、連綿と続く暴力や差別の世界で生き、抗うための英知が秘められている。

以下では、本研究で取り上げた4作品の分析の結果について報告する。

(1) Ben Okri の *The Famished Road* (1991) について

Okri の小説の主人公アザロは、生と死を繰り返す精霊アビクという存在である。アザロは、過去の記憶と現在の記憶を混在して有しており、どちらが過去の出来事で、どれが現在起きていることなのかを判別することが困難であるという。新たな国民のアイデンティティの形成が期待されるナイジェリアの独立期を背景とする本小説において、過去の記憶やトラウマを現世にもたらすアザロの存在は重要である。アザロの語りのもチーフになるのは、奴隷貿易の記憶である。作中で繰り返し、アザロは他の精霊から誘拐され、別の世界に連れ戻されそうになる。アザロが経験する長い旅路は、明らかに奴隷貿易を示唆するものであり、途中の挿話で登場する貪欲な「路の王」はアフリカの人々を労働力として搾取し続けた欧州の国々として理解できる。

過去と現在の混在する時に生きるアザロが示すのは、植民地主義に苦しんだ民族の記憶にほかならず、そうした記憶が現代のアフリカにもたらすインパクトである。批評家の Laura Murphy が指摘しているように、現代の西アフリカの知識人たちは、植民地主義の苦い記憶を避け、植民地主義が始まる前のアフリカ社会やポスト植民地主義の国家の混乱した状況にのみ焦点を当てる傾向がある。アザロの語りは、こうした歴史の忘却を許さず、苦い記憶も現代を生きる人々の重要な一部を成していることを示している。

(2) Toni Morrison の *The Bluest Eye* (1970) について

アメリカの黒人女性作家トニ・モリスンのデビュー作である本作は、公民権運動を背景に、白人社会中心の価値観に異議を唱える、“counter-hegemonic”な作品であるという評価が主流であった。また、黒人コミュニティ内の対立や分裂構造も本作が光を当てる重要な要素であるとされてきた。本研究では、こうした先行研究に立脚しつつも、白人の子どものように青い眼と白い肌を求める少女ピコーラの悲劇を中心に展開する複雑な物語構造の中に、作者モリスン自身の記憶が巧妙に挿入されており、この語りの構造に民族の傷を癒す効果が意図されていることを論じた。

作者モリスンの故郷オハイオ州ロレインを舞台に、9歳のクローディアの秘密の打ち明けから始まる物語は、主として(黒人)読者を語りの内部に誘う仕掛けがいたるところに施されており、悲劇的な物語を共有する人種の共感の共同体を作り上げている。作者、登場人物、そして読者がともに嘆くことで、ピコーラはもちろん、チョリーやポーリーンに刻まれた痛みを分かち合い、傷を癒していく効果が期待されている。しかし、同時に、モリスン自身を代弁するクローディアの語りは、そうした物語を共有する者の倫理的責任、具体的に言えば、ピコーラに悲劇をもたらし共犯者としての読者、の態度を追及する厳しい態度も取っている。

(3) Chris Abani の *Song for Night* (2007) について

ナイジェリアの内戦ビアフラ戦争を舞台にする本作の主人公であり語り手は、すでに死亡しているが、そのことに気が付いていない子ども兵マイラックである。本研究では、アフリカの子ども兵をめぐる人道主義のナラティブの分析から始め、「救済を待つ弱者としての子どもたち」という一面的なスキームを提示する点において、これを「黒人=西欧社会の啓蒙を待つ子ども」という植民地主義時代に流布した言説の延長にあると考える。こうした歴史的支配関係を背景に、本研究では、生と死だけでなく声と沈黙、犠牲者と加害者といった様々な領域を横断し彷徨うあいまいな存在のマイラックが、消費可能なメランコリックな他者という一面的な表象を拒み、さらには彼の曖昧なモビリティはポスト植民地世界における子ども兵に付与されるイノセントな他者というステレオタイプを突き崩すものである点を論じた。

同時に、マイラックの霊的状态は、彼の死が嘆き得ないものであることも示唆している。名もなき使い捨ての道具のように消費されていく子ども兵の死は、過去の戦争の恐ろしさだけではなく、現代の「致死の政治」社会において軽視される生命の在り様についても訴えかけている。作者アバーニは、マイラックを徐々に安からぬ死へと近づけていくことで、そのように消費され失われていく命の弔いを行っているようにも思える。マイラックは、最終的に死の中に自らのエージェンシーを発揮するのではないか。

(4) Octavia Butler の *Fledgling* (2005) について

アメリカの黒人女性 SF 作家のオクテイヴィア・バトラーの遺作である *Fledgling* にはヴァンパイアと人間の混血であるショリが登場する。ショリは、黒人女性の DNA を使い、人工的に生み出された実験体であるが、その皮膚の黒さ故、長年ヴァンパイアが苦しめられてきた日の光に対する耐性を有している。種族の垣根を超えたショリは、しばしばポスト・ヒューマニズムの観点から論じられてきた。しかし、本研究では、テクノロジーが発展した未来における人種の在り方について思弁するアフロ・フューチャリズムの視点からこの小説の読解を行った。とりわけ有益だったのは、アフロ・フューチャリズムを定義づけした Alondra Nelson の論考と人種化された他者である黒人たちの視点から生政治の矛盾や限界を鋭く看破する Alexander Weheliye の著書で、主人公 Shori の複雑に交差する人種的(もしくは生物学的)アイデンティティについて考察を深めていくことができた。

本研究は、ウェヘリエの論考に理論的なベースを置きつつ、西欧中心主義的なヒューマニズムから除外されてきた黒人の民族的経験を中心に考えた時に、どのようなオルタナティブな存在が生み出されているのかを *Fledgling* の中に読み解く試みであった。ショリは、黒人たちが苦しんできた人種差別(小説では種差別)を体現する一方で、ヴァンパイアの新たな存在として種の未来を担う存在として登場する。この意味で、本研究の重要なテーマである「パリンプセスト」として過去と未来の両義性を兼ね備えた子どもとも言える。

【参考文献】

- Abani, Chris. *Song for Night*. Akashic Books, 2007.
- Bernstein, Robin, *Racial Innocence: Performing American Childhood from Slavery to Civil Rights*. New York UP, 2011.
- Butler, Octavia. *Fledgling*. Warner Books, 2005.
- Fanon, Frantz. *Black Skin, White Masks*. 1952. Translated by Richard Philcox, Grove Press, 2008.
- Gilroy, Paul. *The Black Atlantic: Modernity and Double-Consciousness*. Harvard UP, 1993. Print.
- Hall, Stuart. "Cultural Identity and Diaspora." *Colonial Discourse and Post-Colonial Theory: A Reader*, edited by Partick Williams and Laura Chrisman, Columbia UP, 1994, pp.392-403.
- Morrison, Toni. *The Bluest Eye*. 1970. Vintage, 1999.
- Nelson, Alondra. "Introduction: Future Texts." *Social Text* 71, vol. 20, no. 2, Summer 2002, pp. 1-15.
- Okri, Ben. *The Famished Road*. Nan a Talese, 1991.
- Weheliye, Alexander G. *Habeas Viscus: Racializing Assemblages, Biopolitics, and Black Feminist Theories of the Human*. Duke UP, 2014.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 岡島慶	4. 巻 31
2. 論文標題 ラルフ・エリスンのディアスポラ 『見えない人間』におけるディアスポラ哲学の展開	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 127 140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kei Okajima	4. 巻 7
2. 論文標題 "Pain was not only endurable, it was sweet": Re-memory and Healing in The Bluest Eye	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 New Academia: An International Journal of English Language, Literature and Literary Theory	6. 最初と最後の頁 21 38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kei Okajima	4. 巻 87
2. 論文標題 "We Are Nothing If We Don't Know How to Die Right": The Wandering Ghost in Chris Abani's Song for Night	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 黒人研究	6. 最初と最後の頁 88 100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡島慶	4. 巻 89
2. 論文標題 書評 - Raphael Lambert, Narrating the Slave Trade, Theorizing Community	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 黒人研究	6. 最初と最後の頁 171 173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 岡島慶
2. 発表標題 西欧の伝統に対するアフリカン・ディアスポラ文学の交渉と実践:アメリカ、キューバ、ブラジルを例に
3. 学会等名 立命館大学国際文化研究所（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡島慶
2. 発表標題 We Are Nothing If We Don't Know How to Die Right": Song for Nightにおける彷徨えるゴースト
3. 学会等名 黒人研究学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Kei Okajima
2. 発表標題 "And she's only a kid": Blackness and Futurity in Octavia E. Butler's Fledgling
3. 学会等名 The 18th Annual Hawaii International Conference on Arts and Humanities (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----